

2月10日
第1回一般入試

2021年度
入学試験問題

国語

【注意事項】

1. 試験時間は50分です。
2. 問題は1ページから12ページまであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
4. 問題用紙と解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
5. 記述は句読点や記号も字数に数えます。

受験 番号						氏名	
----------	--	--	--	--	--	----	--

宝仙学園高等学校共学部 理数インター

1

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) カンダイな気持ち。
- (2) コンイン関係を結ぶ。
- (3) オクビヨウな人。
- (4) よくイマシめる。
- (5) カクされた秘宝。

2

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 多寡は問わない。
- (2) 語彙の豊かな生活。
- (3) 戯曲を愉しむ。
- (4) 哀れな男の末路。
- (5) 田舎に嫁ぐ。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

川嶋有人は中学の時、転校生の道下がアレルギー発作を起こし救急車で運ばれる際そばにいた。道下は後遺症として言語障害が残ってしまい、川嶋は彼女を助けられなかった後悔から引きこもっていたが、ある日道下から会いたいという電話が入る。

謝らなければ。今この流れに乗らなければ、機を逸してしまう。有人は握り込んだ手のひらに爪を食い込ませた。

A
「……ごめんなさい」

「なに、川嶋くん？」

「僕が……あの日よけいなことをしたから」

ぐっと喉が詰まって、言葉が途切れた。空咳を繰り返し、詰まりを取り除こうとするも上手くない。目尻が熱くなってくる。

「僕の……せいで。なにもわかってないのに……出しゃばって」顎先が胸元につくくらいに、ますます深く頭を垂れた。「み、道下に取り返しのつかないこと……」

(1) 聞こえよがしの大きなため息がテーブルに落ちた。

「やめてくれないかな」微かにではあるが、怒気を帯びた声だった。「あのとき、真っ先に駆けつけてくれたこと、私は感謝してるよ。それについては全然怒ってないの。親を通して、何度も言ってるんだけどな。聞いてない？ 一番の落ち度は私にあるの。自己管理できる年齢だったもの」

有人は顔を上げられない。道下が長く喋っている間、ラ行の不自然さを数えてしまう。

B
「ねえ、聞いているの？」華奢な指が、テーブルを叩いた。「私が川嶋くん

に会いたかったのはね、あの日のお礼を直接言いたかったからなんだよ」

⁽²⁾ 世界の動きがすべて静止した気がした。道下は繰り返し返した。

「聞いている？ お礼を言いたかったの、あの日のこと。だから、どうしても会いたくて、電話しました」

「……お礼？」

「そうだよ。女子たちが気味悪がって遠巻きに見ているとき、川嶋くんが走ってくるのが見えた。川嶋くんだけが、あのときの私に近づいてくれた。それがどんなに嬉しかったかわかる？ わからないよね。わからないから謝ってるんだよね。でも、本当に嬉しかったんだ」

「でも……エビペンはわかんなかったし、先生やお父さんにも怒られたし……」

「エビペンが伝わらなかったのは、仕方ないと思ってる。転入してきて間もなかったし。私の体質が周知されていたら、違ってたかもね。先生、怒ってた？ 誰？ 担任の先生？ いつ？」

「担任……救急車を待つるとき。怒鳴られた」

「意外だな。病院にお見舞いに来てくれたけど、川嶋くんを怒っている雰囲気なんてなかったよ。救急車待ちのときなら、焦^{あせ}ってただけなんじゃないかな。そういうとき、声が大きくなる人って多いでしょ」

言われてみればそうかもしれない。だが、あの日のことは極力思い出したくないのだった。うなだれたまましていると、道下の指がひととき強くテーブルに打ちおろされた。

「私は怒ってるけどね」

びくりと肩が震えた。有人の前のフラペチーノに刺さったストローまで

が、ころりと動いた。

「もちろん、あの日についてじゃない。ついさっき別のことで頭にきた」
下を向きながら、恐る恐る視線だけを上げて道下を窺^{うかが}う。

道下は、小さくなっている有人を、その場に縫い留めるような目をしていた。⁽³⁾

「川嶋くんが、勝手に私の人生決めたことを怒ってる」

「……僕、そんなこと」

してないという弁解も、道下は許さなかった。

「してるよ。さっき言ったでしょ。取り返しをつかないこと、って。思わず遮^さっちゃったけど、あれ、取り返しをつかないことしちやって、ごめんささいって言いたかったんだよね。文脈からして」

そのとおりである。有人は領^{うなず}くしかなかった。道下はまたため息をついた。それからキャラメルフラペチーノのストローの先を啜^{くわ}えて、ついでにむように飲んだ。

「川嶋くん、あの日を境に学校に来なくなったんだよね。正確には、次の日登校したけれど早退して、それ以降ずっと。引きこもってるっていうのも聞いてたよ。川嶋くんのご両親が最初にお詫^わびにいらしたときに、教えてくれた」

道下は声を荒らげなかったが、特別低めもしなかった。引きこもってる、という響きが有人に突き刺さり、次に周りの視線の棘^{とげ}が続いた。まさに針のむしろだった。だが道下は一切の忖^{そんたく}度をしなかった。

「私は学校に戻ったよ。正直、結構厳しかった。最初はみんな、体育館で気持ち悪い姿になって倒れた子が来たっていう顔をした。みんな、あんな

の見たくなかったよね。わかる。私だつて見られたくなかったし。しかもあのころは、今よりもはるかに回れつが回らなかつた。だからなおさら、気持ち悪がられた。でも私は、休まなかつた。早退もしなかつたし、黙りもしなかつたし、ましてや引きこもるなんて。ふふつ、笑っちゃうね」⁽⁴⁾

有人は顔を上げた。道下はきれいなラインの顎を上げて、挑発めいた微笑みを浮かべた。

「川嶋くんが、いつまでもあの日のことを引きずっているなら、私は感謝してるんだつてどうしても言いたかつた。けれど、ここに来てもっと言いたいことができたよ。言つていい？」

微笑みながらも、道下の瞳の奥には憤りの炎が揺らめいていた。

「私と川嶋くんを一緒にしないで。取り返しがつかないお仲間に、私を巻きこまないで。引きこもっちゃつた川嶋くんは、あの日が自分の人生を変えたくらいに思つてるかもしれない。取り返しがつかない、つまり、順当に過ごしていれば未来に得られるはずだつたものを、あの日のせいで永遠に失つたと思つているのかもしれない。私の言語障害も、一生私の足を引つ張るものだつて決めてかかつてるんでしょ？ おあいにく様、違うからこんなことで人生狂つたなんてへこたれるほど、弱くないの」

柔らかな頬つべたをすぼめて、キャラメルフラペチーノを一気に飲み、道下は空になつたコップをどんとテーブルに置いた。

「私はちゃんと生きてるし、やりたいことだつていっぱいある。駄目になつたなんて一ミリも思つてない。でも川嶋くんは、自分と一緒に私の未来も駄目になつたつて決めつけた。それつてすごく失礼だよ。まるで私が死んじやつたみたい。勝手に殺さないでくれる？」

店内の客がこちらを見ている。道下もだ。四方八方から照射される視線は、虫眼鏡で集められた光みたいだつた。当たつたところから有人の体をちりちりと焦がしていく。焦げ目は内部まで到達して、ずっと頭にこびりついてた核の部分をあぶりだす。

—— 未来なんてない。

思い続けてきたそれは、確かに死んでいるのと変わらない。

「決めつけるなら自分だけにしておいて。私は引きこもりするほど暇じゃないから」

圧倒されながら、有人は一つ尋ねた。

「……なんか将来のこととか、考えたりしてるの？」

「私は子どものころから同時通訳者になりたいと思つてるの。米原万里さんのエッセイをニューヨークにいたときに読んで、それからずっと変わらない。今もね」

同時通訳者。喋る仕事だ。ラ行はどうするのか。しかし道下は前を向き続けてる。

「誰に言われたわけじゃない。私がそうなりたいたいんだから、怯んでなんていられない。ラ行は逆風だけど、私の推進力のほうが勝つて信じてる」

道下はこんなに強い子だつたのか。転入してきてからろくに関わりを持たないまま、あの目を迎えてしまつた。道下の人となりも把握しきれていないのに、有人は確かに、自分と同時に彼女の未来も奪われたと思ひ込んでいたのだつた。

「当ててみようか。私が電話をしたとき、後ろに人が何人かいる感じだつた。親戚の方がいらしてたんじゃない？ 告別式のあとだもんね。で、電

話は結構保留にされた。ということ、川嶋くんはそういう集まりと離れて、自分の部屋にいた。違う?」

頷くと、道下は「やっぱりね」と無感動に言った。

「また引きこもっちゃうの? そんな雰囲気だね。なにも変わってない感じ。少なくとも、ここにいる川嶋くんは」

道下の言葉は鋭い槍となつて、ことごとく有人の弱い部分に突き刺さつた。

「それもお似合いかもね。どうせお医者さんにはなれそうもないし」

道下は自分のトレーを手に立ち上がった。

「本当は、お礼を言うだけで終わりがかった。心から感謝してるんだものでも、それ以上に腹が立つちゃったから。ごめんね。まあ見てて。十年後には、私は同時通訳者になってみせる。取り返しがつかない、とかいじけちゃってる川嶋くんは、ご自宅のお部屋にいるかもだけど」

じゃあね、と並びの良い白い歯をこぼして背を向けた道下は、あぜん 啞然とするほど颯爽さつそうとしていた。デニムジャケットを着た背は伸び、顔は進む方向を向いたまま、一度も振り返らなかつた。彼女はどんどん離れて、すぐに見えなくなつた。

(5) 置いていかれたと有人は痛感した。

もう、影も形も見えないほどに差をつけられた。一緒に未来を失つたと思つていた相手に。

しかし、だ。有人は道下が飲めないと言つたダークモカチップフラベチーノを、猛烈な勢いですつた。本心から悪かつたと頭を下げたのに、ひどい言われようではないか? 気に障つた内容はわからなくもないが、

ああまでこき下ろされる必要もない。特に最後なんて、ひどかつた。

有人にとつて、道下は『あの日』の大きいなる負を唯一共有する存在だつた。それなのに、失態を馬鹿にして散々嘲あざむつたクラスメイトよりも、よほど厳しい言葉を投げかけてきた。

——私と川嶋くんを一緒にしないで。

道下に囁ささわれたくない。

(6) あの日と絶望を繋つなげていた糸の一本が、ぶちんと切れた気がした。

(乾ルカ「明日の僕に風が吹く」による)

〔問1〕 聞こえよがしの大きなため息 とあるが、ここから道下のどのよ

うな気持ちを読み取れるか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 久しぶりに会えたのだから楽しく話をしようとする気遣いに水を差されたことに対して、思わず漏れ出てしまうほどの不愉快な気持ち。

イ 道下の気持ちを考えないままに自分本位な思い込みと謝罪をしようとした有人に対して、強い苛立いらだちを見せつけたいという気持ち。

ウ 己のことばかりに精いっぱい、目の前にいる道下の困難な境遇や現状に關しての配慮が全くない有人に対して、失望し見下す気持ち。

エ 自分が学校でつらい目に合う原因となつた有人とこれから話さなければならぬことに対して、ひどく憂鬱で逃げ出したいような気持ち。

〔問2〕 世界の動きがすべて静止した気がした。 とあるが、なぜか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 謝らなければとばかり考えていたが、道下から感謝しているという予

想だにしていなかった言葉を聞いたために驚いてしまい、何も考えられなくなっているから。

イ 謝らなければとは思っていたが、カフェという公共の場で同じ年の女の子から怒られているという構図が考えていた以上に恥ずかしく、顔も上げられないから。

ウ 謝らなければいけないことは理解していたため、多少なりとも糾弾されることは覚悟の上であったが、考えていたよりも強い道下の怒りの感情に動揺しているから。

エ 謝らなければならぬことをしてしまったと思っていたが、道下に残ってしまった後遺症の重さを目の当りにし、自分の罪の重さで打ちのめされているから。

〔問3〕³⁾ その場に縫い留めるような目 とあるが、この表現から分かることはなにか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 有人が周囲の視線に委縮していることに気付きつつも、全く見当違いの内容で侮辱されたことへの強い怒りを道下が感じているということ。

イ 有人がこの場から逃げ出そうとしていることを察知し、過去の事件に決着をつけるまでは絶対に離さないと道下が決意しているということ。

ウ 予想していた内容とは全く違う部分について道下が怒っていることは分かるが、有人がその怒りの原因が理解できないままに強い圧力を感じているということ。

エ 過去の事件についての誤解を解こうとしたが上手くいかず、有人がこのままでは責任を取らされてしまうのではないかと怯えているということ。

と。

〔問4〕⁴⁾ ふふつ、笑っちゃうね とあるが、なぜ笑ったのか。その理由を

九十字以内で説明せよ。

〔問5〕⁵⁾ 置いていかれたと有人は痛感した。とあるが、どういうことか。

六十字以内で説明せよ。

〔問6〕⁶⁾ あの日と絶望を繋げていた糸の一本が、ぷちんと切れた気がした。

とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 今までは過去の事件に囚われ、自分の将来が失われたと思い込んでいたが、道下とのやりとりを通して自分の未来について前向きな考えを持ち始めたということ。

イ 今までは道下を救えなかったという自責の念から、自分は医者になる資格がないと思いついていたが、道下の激励により再度自分の夢へと向かう覚悟ができたということ。

ウ 今までは道下や周囲からの非難に怯えるあまり他者との交流を極端に避けていたが、改めて道下と話してみることで気付いていなかった人の温かさを理解し始めたということ。

エ 今までは罪悪感から道下と会うことを拒み続けていたが、今回道下と話したことをきっかけに自身を見つめ直したことで、過去の事件と向き合うことができたということ。

〔問7〕 本文から読み取れる道下の人物像として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 怒りから短絡的な発言をする傾向があるが、会いつらいはずの人物と

も顔を合わせて話をしようとする、礼儀のある人物。

イ 厳しい口調から学校内でも友人から遠巻きに見られがちではあるが、学校に來ない知人を激励する優しさのある人物。

ウ 将来の夢に向かって強く生きていこうとしているだけでなく、自分の気持ちを物怖じせず伝えられる、芯のある人物。

エ 周囲からの嘲笑に対しひどく傷ついているため他人に心を開くことを恐れて、必要以上に攻撃的な言動をしてしまう人物。

〔問8〕 ……線A～Dの表現の特徴として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 有人の台詞を ……ごめんなさい……のような「……」が多用される暗い話し方により、常に後ろ向きで悲観的な性格が分かりやすく表現されている。

イ 華奢な指が、テーブルを叩いた のような道下の外見に対する好意的な描写がなされることにより、有人在学時からひそかに抱いていた淡い恋心が表現されている。

ウ 周りの視線の棘が続いた のような店内にいる客たちが有人に注目する描写は、事実とは全く異なる有人の妄想であり、有人の自意識の強さが表現されている。

エ キヤラメルフラペチーノを一気に飲み のようなフラペチーノを飲む様子を描写することにより、これまでよりも道下の言葉の勢いと力強さが増したことが表現されている。

4 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

微生物にとって哺乳動物の体内は温度が一定で、栄養分も豊富な恵まれた環境だ。なんとかして潜り込んで繁殖しようとする。だが、宿主にとっては、病原性を持った微生物は迷惑な存在だ。感染すると、細胞が傷ついたり栄養分を横取りされて衰弱したり、遺伝子を乗っ取られて細胞ががん化することもある。

そこで宿主は免疫による防御システムを発達させ、微生物を排除、あるいは懐柔しようとする。他方、微生物は宿主の攻撃を巧みにくぐり抜けて、この快適なすみかから追い出されまいとしがみつく。

その結果、両者の関係は以下の四つのいずれかの結末に落ち着く。これは人間の戦争と変わらない。

第一は、宿主が微生物の攻撃で敗北して死滅する。この場合は、他の宿主に移らないかぎり微生物は宿主と運命を共にすることになる。致死率が高いアフリカのラッサ熱やこれまでのエボラ出血熱が、局地的な流行で収まってきたのはこのためだ。病原体の見当もつかない病気が過去に流行して、多くの人が死んだ記録が残されているが、両者が共倒れになった例とも考えられる。

たとえば、一五世紀末から一六世紀半ばにヨーロッパ各地で何回か流行した「伝染性発熱発汗性症患」⁽¹⁾。高熱と大量の発汗で短時間に衰弱して死ぬ病気だ。ロンドンの流行は、数千人が死亡したとされる。原因不明だが、未知のウイルスによる肺炎とみる説もある。

第二は宿主側の攻撃が功を奏して、微生物が敗北して絶滅する場合だ。ワクチンの効果によってすでに天然痘は根絶され、ハンセン病やポリオや

黄熱病^{おうねつびょう}なども、いずれ同じ道をたどる期待がある。

第三は宿主と微生物が和平関係を築くことだ。宿主の体内には、莫大^{ばくだい}な数の微生物が存在する。宿主の顔色をうかがいながら共生しているの、「日和見菌」とよばれる。体内で権力の行方を推し量³っている老獪^{ろうかか}な政治家である。

ふだんはおとなしくしているが、宿主の免疫が低下した場合には牙をむくものがある。これを「日和見感染」という。一方で、人にとって欠くことのできないパートナーになったものも少なくない。

第四は、宿主と微生物がそれぞれに防御を固めて、果てしない戦いを繰り広げる場合だ。水痘（水ぼうそう）ウイルスはひとたび感染すると、宿主の神経細胞に永久に潜む。平和共存のようにみえても、忘れたころに復活して带状疱疹^{たいじょうほうしん}などを引き起こす。

こうした宿主と微生物とのせめぎ合いは、軍拡戦争にたとえられる。むしろテロとの戦いに近いかもしれない。人類は病気を抑え込むために次々と新たな手段を開発してきた。⁴ ワクチンや抗生物質などの薬剤の開発で、多くの感染症が抑えられるようになった。とくに、乳幼児の感染症が減って死亡率が急減したことが、世界人口の急増や平均寿命の長命化につながった。

それにもかかわらず、日常にかぜや下痢に悩まされ、新型インフルエンザや風疹^{ふうしん}のような突発的な流行に、依然として脅^{おび}えなければならぬ。微生物は耐性を獲得することで、人が繰り出す新たな兵器を巧みにいかくぐる。宿主側はさらに対抗手段を強化しなくてはならない。

このようなイタチゴッコは、⁵ 「赤の女王効果」として知られる。ルイ

ス・キャロルの『鏡の国のアリス』のなかに、この女王は登場する。「いいこと、ここでは同じ場所にとまっているだけでも、せいっぱい駆けてなくてはならないんですよ」とアリスに忠告する。まわりの風景も、同じスピードで動いているので、同じ場所にとどまるためには全力疾走を続けなければいけないのだ。

宿主がいかにすぐれた防御機構を備えても感染症から逃れられないのは、この「赤の女王」に似ている。病原体から身を守るために、宿主となる生物は防御手段を進化させる。それに応じて、病原体は防御手段を破って感染する方法を進化させる。

X

抗生物質によってほとんどの細菌は死滅するが、耐性を獲得したものが生き残って増殖を開始する。細菌は抗生物質を無力化する酵素をつくりだし、自身の遺伝子の構造を変えて攻撃に耐えられるように変身できるからだ。

とくに、人と微生物の世代交代の時間と変異の速度を考えると、抗生物質と耐性獲得のこの追いかっこは圧倒的に微生物側に分がある。ヒトの世代交代には約三〇年かかるが、大腸菌は条件さえよければ二〇分に一回分裂をする。ウイルスの進化の速度は人の五〇万〜一〇〇万倍にもなる。現生人類の歴史はせいぜい二〇万年だが、微生物は四〇億年を生き抜いてきた強者^{つわもの}だ。

【※】

この耐性の獲得は「親から子へ」という「垂直遺伝」だが、非耐性の菌が別の菌から耐性遺伝子を受けとる「水平遺伝」も耐性菌の勢力拡大の強

力な武器である。青カビから発見された抗生物質のペニシリンは、一九四〇年代に使われはじめたときに、その劇的な薬効で「魔法の弾丸」ともてはやされ、二〇世紀最大の発明の一つに数えられる。

名画『第三の男』（キャロル・リード監督）には、戦後間もなく人びとがこの特効薬を求めて狂奔する時代を背景に、薄めたペニシリンで大もうけするヤミ商人役を名優オーソン・ウェルズが演じている。

ペニシリンの発見をきっかけに、さまざまな抗生物質が発見された。だが、数年後にはペニシリンが効かない耐性菌が出現した。微生物はいとも簡単に「防弾ベスト」を身につけた。⁽⁶⁾これだけ短期間に耐性菌が広がったのは水平遺伝に負うところが大きい。

追いかけては依然としてつづいている。新たな特効薬がつくられるやすぐに耐性菌が出現する。子どもをもっている人なら、急性中耳炎がしつこくなくてなかなか治らないのに手を焼いたことがあるだろう。これも抗生物質に対する耐性菌が減ったためだ。

（石弘之「感染症の世界史」一部改変 による）

〔問1〕⁽¹⁾ 伝染性発熱発汗性症患⁽²⁾ が「第一」のケース、天然痘⁽²⁾ が「第二」のケースの例であると言えるのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 「伝染性発熱発汗性症患」は微生物の毒性が強く致死率が高いため宿主の免疫が低下すると死を招く恐れがあり、「天然痘」は人間が開発したワクチンの効果が顕著に現れた結果根絶やしにされたため。

イ 「伝染性発熱発汗性症患」は未知の強力なウイルスによって肺炎が引

き起こされた結果ヨーロッパ各地で局地的に流行し、「天然痘」を引き起こしたウイルスは人間側の攻撃によって根絶したため。

ウ 「伝染性発熱発汗性症患」は宿主の死とともに病を引き起こした微生物も死滅し未だに有効な対症法が見つかっておらず、「天然痘」は原因となった病原菌が絶滅しこの世から姿を消した病であるため。

エ 「伝染性発熱発汗性症患」は高い熱が出て大量に汗をかき非常に短い期間に衰弱して大量の人間が死に至る病であり、「天然痘」は微生物が人間との戦いに敗北し徹底的にその存在を否定されたため。

〔問2〕⁽³⁾ 権力の行方を推し量っている老獪な政治家とあるが、ここで「老獪」という表現を用いているのはなぜか。その理由の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 微生物が宿主の顔色をうかがいながら、体内にいる別の菌が弱体化した時に幅を利かせようと長い年月をかけて待ち構えているから。

イ 微生物が宿主の免疫の状態や環境によって自らの活動を変化させ、宿主の体内で生き残るためにずる賢く立ち回っているから。

ウ 微生物が宿主と和平関係を築くために、自らの繁殖のことは後回しにして共存を図ろうという老成した振る舞いを見せているから。

エ 微生物が宿主と果てしない戦いを繰り広げ、宿主の防御がゆるくなつたのを見計らって自らの居場所を確保しようと企んでいるから。⁽⁴⁾

〔問3〕⁽⁴⁾ ワクチンや抗生物質などの薬剤の開発とあるが、開発された「ワクチンや抗生物質などの薬剤」を言い換えた比喻表現を傍線部⁽³⁾以降から探し、十字以上十五字以内で抜き出せ。

〔問4〕⁽⁵⁾ 「赤の女王効果」という表現によって、筆者は「宿主」と「病原

体」についてどのようなことを述べようとしているのか。七十字以内で説明せよ。

〔問5〕 X には次のア〜エの文が入る。正しい順序に並び替えてよ。

ア 投手（病原菌）が打者（宿主）の弱点を探し、いろいろな球種を繰り出して打者を打ち取ろうとする。

イ 野球の投手と打者の関係にたとえるとわかりやすい。

ウ 一方、打者は弱点を克服して新たな球種に対応して打ち返そうとがんばる。

エ そこで、宿主はさらに新しい防衛手段を進化させ、生命が存続するかわりにこの追いかけっこをやむことはない。

〔問6〕 ⁶⁾ これだけ短期間に耐性菌が広がったのは水平遺伝に負うところが大きい。とあるが、「垂直遺伝」では「水平遺伝」ほど耐性が広がっていかないのはなぜか。七十字以内で説明せよ。

〔問7〕 本文【※】以降の部分には、本来使われるのとは反対の意味の言葉を用いたために意味の通らなくなっている部分がある。その部分を三字で抜き出し、さらに正しく改めて答えよ。

〔問8〕 次に示すのは、この文章を読んだ五人の生徒が「感染症」について話し合っている場面である。本文の趣旨と明らかに異なる発言をしている生徒を一人選び、ア〜オの記号で答えよ。

ア 生徒A——二〇二〇年は人類が新型コロナウイルスに翻弄された一年だったね。人間と新型コロナウイルスとの関係は本文で言うところのどの関係に落ち着くのかな。感染の状況を考

えると、第一のケースはないだろうね。

イ 生徒B——微生物との関係についていろいろなんだね。「日和見感染」は第三のケースに分類されているけど、この菌は顔色をうかがいながら人間との共生を図ろうとする中で、人間のいいように飼いならされてきたというわけか。

ウ 生徒C——莫大な数のウイルスが存在する中で、今回我々が苦しめられている新型コロナウイルスとの戦いは、本文で述べられているように人間と微生物との間で起こっている軍拡競争のようなものだと言えるね。

エ 生徒D——ウイルスだけじゃなく人間がつくり出した抗生物質や薬剤にも目を向けてみると、微生物の増殖の速度は人間を圧倒的に上回るから、微生物はどんどんと耐性を獲得していくということになるんだね。

オ 生徒E——ということは、我々の前にはこれからもどんどんと病原体が現れてくるし、今後も人類は微生物との戦いからは逃れられないということになるね。医療のさらなる進歩に期待したいな。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

色深き葉広がしはの葉を広みもちひぞつゝむいにしへゆ今に⁽¹⁾

正岡子規

『墨汁一滴』は明治三十四年(一九〇一年)一月から七月にかけて新聞「日本」紙上に連載されたが、その五月七日のくだりには柏餅を詠んだ歌が十首載っている。これはその最後の歌。緑の色も深々と生い茂る柏の葉は広くて大きいので、餅を包むのに使うのです。昔から今にいたるまで——というのである。訳してしまえば何ということもない内容なのだが、「葉広がしはの葉を広み」の同義反復といい、「もちひぞつゝむ」といったん決然^Aといい切ってから「いにしへゆ今に」と安らかに終息させているところといい、調べのよく練れた歌である。

「葉広がしは」の「葉広」は古代の言葉であるが、単に葉が広いというだけではなく、樹木の葉が盛んに茂っているのを誉め讃^{たた}える意味合いがこもっていたようだ。『古事記』に収録されている歌には「其が下に生ひ立てる葉広五百箇真椿」(その下に茂っている広い葉のみごとな椿の木)、「山の峽に立てる葉広熊白櫛」(谷間にどっしりと根を下ろしている広い葉をつけた大きな櫛の木)などのいい回しがみえる。

この柏の木に、古くは「葉守の神」という守護神が宿っていると信じられていた。大きなみごとな葉を茂らせる生命力のゆえだろう。御所の守りに当たる兵衛府や衛門府を「柏木」と呼ぶことがあるのは、この「葉守

の神」の宿る木になぞらえているのである。『源氏物語』のなかで、光源氏の晩年の正室となった女三宮と密通し、懊惱^Bのうちに自滅する柏木は衛門督すなわち衛門府の長官だった。

樹木のなかでも柏をことに生命力の強い木と見なしていたのは日本ばかりではなく、古代ギリシアでも同じだったようだ。そこでは柏は櫛とともに最高神ゼウスに捧げられた聖木であったという。

⁽²⁾端午の節句に柏餅を食べるのは江戸時代に入ってから広まった比較的あたらしい風習である。旧暦五月(太陽暦六月ごろ)は昔から悪月として恐れられてきた。ちようど気温も上がり長雨が降りつづく時期に当たり、毎年、伝染病や洪水に見舞われるからである。そこで人々は五月五日の端午の日に、菖蒲を軒に葺き、笹で巻いた粽を食べ、菖蒲や笹にこもる生命力を借りて、人力を超える魔から身を守ろうとした。

端午の節句が武を尚ぶ日になるのは武家の時代に入ってからである。「菖蒲」の音が「尚武」に通うところから、男の尚武の気性を養う日として祝われるようになる。柏餅もまた武家社会の端午の新しい節物として考案されたのだろう。直接的には柏が朝廷の守護に当たる兵衛、衛門の象徴だからであるが、柏餅を考えだした当時の人々の心の奥には、柏の木に宿る「葉守の神」の力、今風にいえば柏の木の強い生命力にあやかりたいという思いがあったにちがいない。「五月五日にはかしは餅とて櫛の葉に餅を包みて祝ふ事いづこも同じさまなるべし。昔は膳夫(料理人)をかしはでと言ひ歌にも『旅にしあれば榎の葉に盛る』ともあれば食物を木の葉に盛りし事もありけんを、今の世に至りて猶五日のかしは餅ばかり其名残をとどめたるぞゆかしき。かしは餅の歌をつくる」。子規は柏餅十首の前に

そう書きつけている。ここに引かれる「旅にしあれば」の歌とは『万葉集』巻二に収める有間皇子の歌をさす。

家であれば筈に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

有間皇子

わが家にいさえすれば、ちゃんとした器に盛りつけるはずの飯を、今は旅の途上にある身なので椎の葉に盛る——というのである。「草枕旅にしあれば」とさりげなくいつているが、この旅とは死への旅だった。

有間皇子は斉明四年（六五八年）冬、蘇我赤兄にそそのかされて企てたクーデターが早々と露見し、赤兄その人に捕らえられて、斉明天皇の行幸先である紀伊の牟婁の温泉（今の和歌山県白浜町の湯崎温泉）へ送られ、訊問の後、処刑される。これは護送途中での歌である。

飯を椎の葉に盛るのは捕らわれの身で器など使わせてもらえないからだろうが、やはりここにも草木の□への古代人特有の信仰が読みとれるだろう。言葉の表面上は器がないので飯を椎の葉に盛る、というただそれだけのことなのだが、託されているのは何とか生き永らえたいという悲痛な祈りである。皇子はこのとき、まだ二十歳にもならない若者だった。

柏木といい有間皇子といい、「葉守の神」に寄る人々が若死にするのはどうしたことだろうか。そして、我らが子規もまたその一人である。

子規にとって五月は厄月だった。第一高等中学予科の学生時代、東京本郷の寄宿舎で一週間に及ぶ大量喀血があったのは明治二十二年（一八八九年）五月、後に新聞記者となって日清戦争に従軍しての帰途、遼東海上

の船中で二度目の大喀血をしたのは明治二十八年五月。その後も五月がめぐってくるたびに病は勢いを増して子規を苛んだ。

柏餅の歌の載った三日前、すなわち五月四日付の『墨汁一滴』にはこんな歌がみえる。

いちはつの花咲きいで、我目には今年ばかりの春行かんとす

正岡子規

生きて見るのは今年が最後という思いで庭のいちはつの花を眺めているのである。実際はもう一度だけ春はめぐって来たのだが、このときは、今年の五月は越せぬというあきらめが子規にはあった。そうしてみると三日後の柏餅の歌もやはり命を惜しむ祈りの歌なのである。

（長谷川權「子規の宇宙」一部改訂 による）

〔問1〕 葉を広み⁽¹⁾ の現代語訳を、本文の中から抜き出せ。

〔問2〕 決然^A 懊惱^B の意味を次の中から選び、記号で答えよ。

A 決然……ア 予想もなかったことにひどく驚く様子

イ 思い切って覚悟を決める様子

ウ なりゆきに合わせて決める様子

エ おっとりとした落ち着いた上品な様子

B 懊惱……ア 心身をなやます欲望にとらわれること

イ あれこれ迷って行動できずにいること

ウ 希望や期待がまったくなくなる

エ 心の底でなやみ苦しむこと

〔問3〕⁽²⁾ 端午の節句に柏餅を食べるとあるが、その理由を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 主に武家社会において、男性が武を志しより強くなるために、柏で巻いた粽を食べることで、柏の木の強い生命力にあずかろうとしたから。
イ 菖蒲や笹にこもる生命力を借りて身を守るために、柏で巻いた粽を食べ、旧暦五月に多かった伝染病や洪水から身を守ろうとしたから。

ウ 武家の男性にとっては、椎の葉が何よりも重要な朝廷を守護するという任務に就く役割を担った、兵衛や衛門の象徴であったから。

エ 昔から万葉集をはじめとした記録などにも、端午の節句には柏餅を食べる風習があったということが残っていたから。

〔問4〕⁽³⁾ 旅にしあれば椎の葉に盛るの中に込められた和歌の作者の心情を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 処刑されることが決まっている旅ではあるが、少しでも生き延びたいという心情。

イ これから処刑されるかが決まる旅であるため、処刑が決まらないでほしいという心情。

ウ 無実の罪で処刑されることが決まっている旅であるため、死ぬ前に無実を証明したいという心情。

エ 処刑されることが決まっている旅であるため、これ以上生き延びることをあきらめようという心情。

〔問5〕 文中の□に入る三字の語を文中より抜き出して答えよ。

〔問6〕⁽⁴⁾ 今年が最後 ということがわかる表現を、正岡子規の和歌の中から

ら 五字以内で抜き出して答えよ。

〔問7〕 次の中から、文中の短歌について説明したものを選び、記号で答えよ。

ア 「色深き……」の短歌は、緑の色が深々として生命力の象徴を意味する柏の葉に包まれた餅を目の前にして、いつまでも生き永らえることができるという希望に満ちた幸福感を読みとることができる。

イ 「色深き……」の短歌からは、昔から今にいたるまで多くの人々が生命力の象徴として食べてきた柏餅を見ながら、自身の残りわずかな命が少しでも続くようにという祈りを読みとることができる。

ウ 「家があれば……」の短歌からは、自身が関わったクーデターが早々に露見した結果、捕らえられて処刑場に向かう旅の中で詠んだものであり、目の前の現実を見ようとせず、空想の世界に逃げようとする作者の姿勢を見ることができるといえる。

エ 「いちはずの……」の短歌からは、何度も血を吐き、病に身をむしばまれていた作者の、いよいよ命が尽きることを覚悟し、春になるまで待つことはできないだろうというあきらめの思いを見ることができるといえる。